

## 国際協力特別賞

### 1 アップコミュニケーション

お茶の水女子大学附属中学校 2年

今井 つぐみ

私が三年間住んでいたケニアでは、主に外国人から仕事を得るために必要な公用語としての英語は使われているものの、ケニア人が普段家族や友人、あるいはケニア人同士で話す言語としてスワヒリ語が存在する。

当時私は十歳で、ローマ字はなんとか書けるものの、英語で会話することは難しく、ましてスワヒリ語は聞いたこともない全く未知のもので、この先どうやって現地の人々とコミュニケーションをとってよいのか分からず途方に暮れていた。

そんな不安の中での出来事。登校初日にスクールバスが学校に着くと、生徒たちが降りる時にケニア人のドライバーに何かを言っていることに気がついた。しかし何とっているのか聞きとれず、三日ほどドライバーに何も言えなかった。居心地悪く過ごしていると、友達が「アサンテサナ（ありがとう）、と言うんだよ。」と教えてくれた。翌日、「アサンテサナ」と小声で言ってみた。すると「カリブ（どういたしまして）」と真っ白な歯をむき出しにして笑顔で返してくれた。その一瞬で、今までの伝えられないモヤモヤとした気持ちが一気に晴れた。さらに翌日、同じように「アサンテサナ」とこなれた気持ちで言うと「カリブ！トゥタオナ」と返ってきた。え？なんて？どうしたらいいのだろう？「ありがとう」「どういたしまして」のフレーズ以外に何かが始まってしまった。困る。とりあえず愛想笑いでごまかした。そんなやりとりが数回あり、「トゥタオナナ」と言っているような気がして、家のお手伝いさんにこの言葉の意味を聞いてみた。「トゥタオナナケシヨ？また明日って事よ！」なんだ、そうだったのか。一週間もずっと気になっていた言葉は「また明日」だったのか。翌日、早速自分からドライバーに「トゥタオナナケシヨ」と言ってみた。私から話しかけられて、彼は最初驚いた様子だったが、すぐに満面の笑みを浮かべて「トゥタオナナケシヨ！」と返してくれた。私は自分の部屋に帰ってからも、返事をしてもらえた嬉しさと、きちんと伝わったんだという達成感でいっぱいだった。それと同時に他の言葉も覚えてみたいという気持ちが湧いてきた。しばらく経ったある日、市場でスイカを買う機会があった。「ハウマッチ？」と聞いた後で、覚えてばかりの「キアシガニ？」と言ってみた。するとスイカ売りのおばさんの顔が笑顔になり、五十円程まけてくれた。スワヒリ語パワーすごい！外国人である私が必死でスワヒリ語を話したことにご褒美をもらえた、そんな体験だった。

コミュニケーションとは何だろう。一言で言えば情報伝達。日本でも、言葉の異なる世界でも伝えたい気持ちを諦めず、私の1アップコミュニケーションを実践し続けたい。